

つがるの昔っこ (昔話) 14

蛇の嫁コ (津軽弁)



国土交通省 東北地方整備局
岩木川ダム統合管理事務所
イラスト：やざわ ゆな
カラーリング：つしま けいこ



昔、ある村さ一人の若者（わけもの）居だど。この若者ア、ながながの働き者であったばて貧乏だどごで、誰（だん）も嫁さくる者アいねがったど。

ある日、この若者よ、山さ焚ぐ木ば切りに行ったんず。したきや、一匹の白一い蛇こせ、岩の間さはさまて、もがいであったんずおん。『あらあら、かわいそうに、転がてきた岩さはさまれだびよんな。どらどら』て、岩ばよげで蛇ば出してやったど。『どごも怪我ア無がったな。それだばいいあんべした。さ、山さ帰れ、今度（こんだ）気をつけで行げ』て放してやったど。

それがら何日かしたある日の事だ。若者ア、畑耕してらきや、一人の色の白えめごーい娘コ、ベ
ろっと来て、『私(わ)ア 旅の途中の者(もん)だばて、疲労(おた)ってまたどごで、何とか
一晚泊めでけへ』若者『泊めでやるのアカまわねばて、おらの家、この通り貧乏屋で、何もかまて
やらえねじゃ』て言(し)たきや、『何もえごし。泊めでてもらうだけでありがでごし』て言
(し)て、娘コアその晩(ばげ)泊めでもらたど。



次の日、若者起きでみだきや、昨日の娘コアいっつが起きで、まの仕度してあつて若者さ食
(か)へたど。一人者の若者、今まで食った事ねんた旨(め)え飯(ま)であたど。『わい旨
(め)じゃ、なんぼ旨(め)ば』て喜んで食たきや、娘ア嬉しそうにニコラツと笑て『へば、晩も
又こさえるはんで』て言(し)たど。『お前(め)、旅さ行かなくてもいいんだが?』て聞いた
きや、『いいんだおん。少し訳あるはんで、私(わ)とばこごさ置いてけねべが』



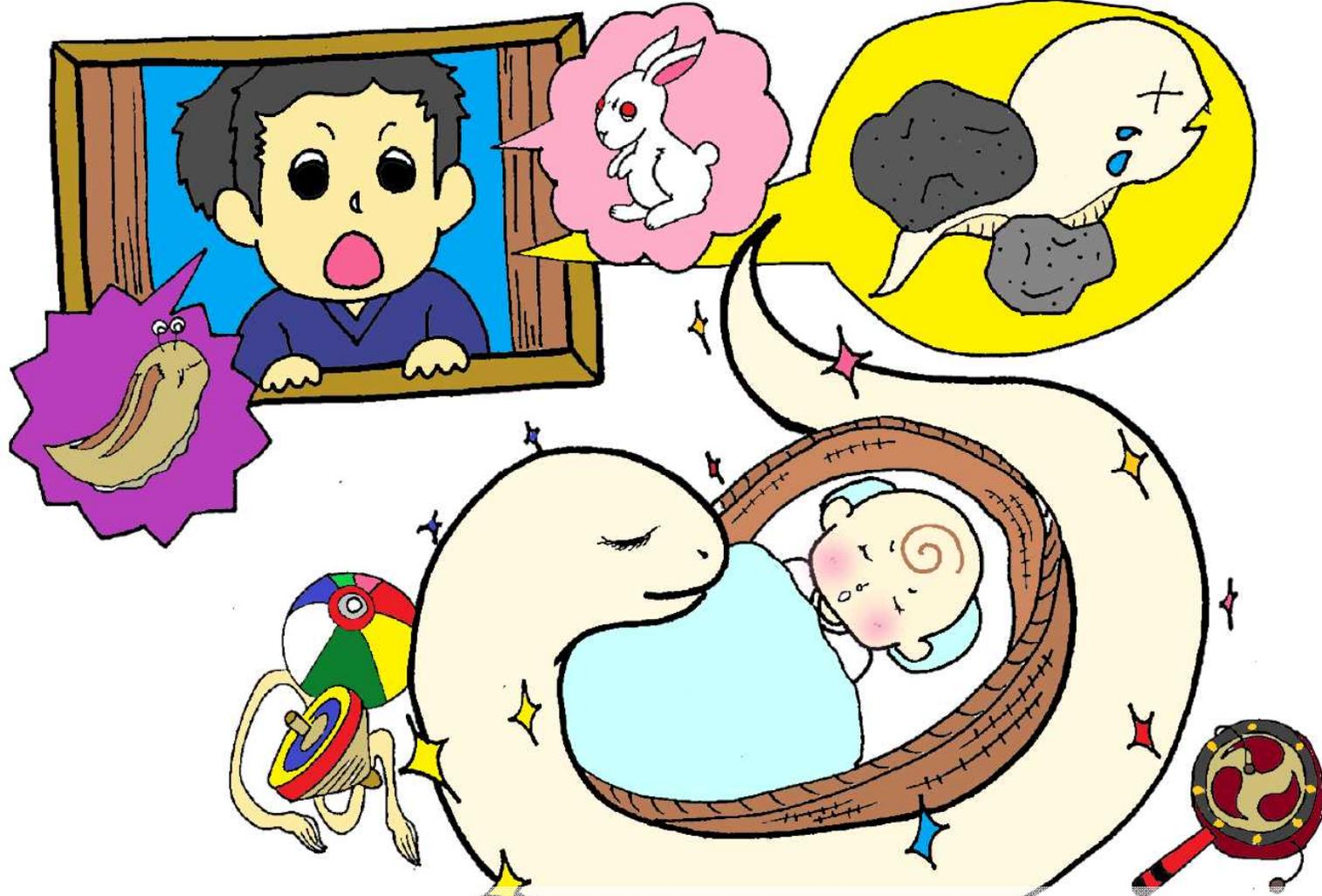
『何（なん）ぼ居でもいいばて、おらの家はこしたに貧乏だはで、朝から晩まで稼がねばまね。おめだけんたアネコさだばとつてもつとまらねえべね』『私（わ）も働ぐの好きだはんで』て娘コアここで若者ど一緒に暮らすことになったど。

なるほど、この娘、朝から晩までへごまによく働ぐど。特に若者ど一緒に山さ山菜とりに行けば、『ワラビだば、あっちの林の方さあるびょん』『タケノコだば、こっちの山さ余計（よげ）あるびょん』て云（し）てそっちや行ってみれば本当に、びっくりすほど山菜あつたど。『山歩きだば、おら一番だと思（も）てあたばて、お前（め）さだばかなわねじゃ』て若者感心してまたど。娘『わいはあ』って恥ずかしそうにニコッと笑うばしだど。



— (ひと) 月過ぎ、二月過ぎて、そして二人は夫婦になった。毎日朝早くから晩 (ばげ) まで汗流して働いで、それでも二人ア倅 (しあわせ) であった。畑耕して、山さ木伐 (き) りに行つて、雪降れば時々罨 (か) げに行つて兎を獲つてきて、兎汁作つて食た。『わい、旨 (め) じゃ』て云 (し) て、嫁コア兎汁なもかも好きであた。春になれば又二人で山菜とりに行ぐ。ところが、嫁コアナメクジ大嫌であつたずおん。ナメクジ見れば顔まっ真になつて、足すくんで動げねぐなつてまるんだ。『山好きだお前 (め) でも怖 (おこ) ねものあるんべびよんな』て笑つて、若者そのたんびに嫁コとば背負 (おぼ) って家さ帰つた。

この嫁コのおかげで、若者の家は、だんだん裕福ネなっていっただ。そしてるうちに、嫁コア赤ん坊産んだ。二人アなもかも可愛（めご）がってこの赤子は育でだ。ある日の事だ。若者、山さ仕事に出掛（でが）げだばて、途中忘れ物さ気づいで家さ戻って来た。して、赤子こどしらべなあと思（も）て、うーって家の中はのぞいて見だきやどってんした。



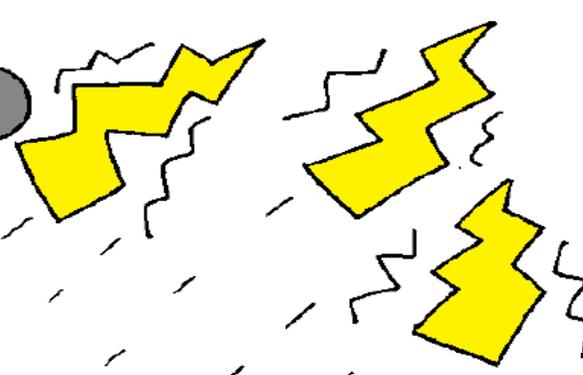
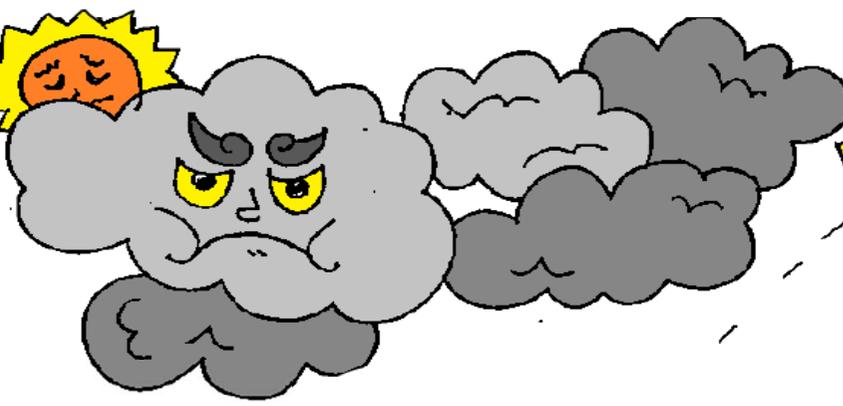
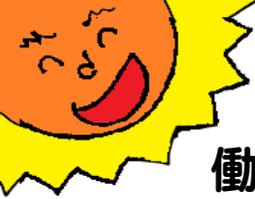
一匹の大（で）ったただな白い蛇が赤子の入った嬰兒籠（えんつこ）ばぐるっと抱ぐように巻いで、二人、スヤラ、スヤラて気持ちえぐ眠（ね）てあた。それ見た若者『あっ』て気づいた。『んだが、お前（め）アあの時、我（わ）助けでやったあの蛇であつたんだべ。どうりで兎の肉好きだり、ナメクジ嫌（きれ）えだりしたわけだ』って、一人でつぶやいでこそらっとそご離れで又山さ行っただ。

夕方、若者家に戻ったとき、嫁の姿、どこさも無かった。ニコニコ笑っている赤子の嬰兒籠（えんつこ）さ一枚の紙きれこはさんであて、見んだとき、『私は、あなたに助けられた蛇です。このまま、この家であなたといつまでも暮らしたかったのですが、私の正体を見られたからには、もうこの家にいる事はできません。あなたと暮らして私はとても幸せでした。赤ん坊が握っている玉は、私の片方の目玉です。これをしゃぶらせて育ててください』て書いてあつた。



赤ん坊はその玉をしゃぶりながら大きくなつた。父親に負けねえほどの立派な若者になってせつせど稼ぐごで、この家アますます裕福になつて、いい娘コば嫁こにもらつて、みんなで幸せに暮らしてらど。





今はジサマになって
 しまった若者、もう何も
 働がねくてもいいぐなつた
 ばて、毎晩、山さ帰って行った白い
 蛇の嫁コの夢は見るんだと。無性に
 会いたくてたまらなくてあたど。



ある秋のカララツと晴れだ日。『今日ア天気いい
 はで茸でもとってくるがな』て、ジサマが籠（こ
 だし）ば背負って山さ出掛けた。その日アキノゴお
 もしれだけ生（おが）てあつたど。ジサマ、キノ
 ゴにつられて知らねうちに山の奥さ奥さ入って
 まつたずおんな。『女心と秋の空』てす。変わり
 やすいズ事だ。

朝、家を出る時だば、あれほどカララツと晴れで
 あつた空、雲ムクムクムクど出で来た
 ど思（も）たきやガラガラガラど
 雷鳴ってザザーツて空、あがるん
 だけんた雨降って来たずおん。
 『わいわい、わいわい』ジサマ
 どごが雨宿りする所（どご）
 ねべがど思（も）てウーツて
 見だきや、ちよんどいい
 あんべに、そごさ洞窟あて
 あたど。ジサマ、そごさ駆
 け込んで雨宿りした。





ズーと雨宿りをしてらきや、女心だもの・
あらほとんど降ってら雨、又嘘だけんたに上
がったど。ジサマ、『さ、へば行くがな』ど
思（も）て、後さ置いただ箆（こだし）ば取
る気なたきや、洞窟のズーツと奥の方さ白ー
ぐ光っているものあったど。



『わい、何だべな』と思（も）て近づいて行ってみだきや。白ーぐ光っているもの、一匹の蛇であった。ジサマどぎっとしてよーぐ見だきや、もうその蛇は死んであったど。そばさ寄って抱き上げて見だきや、その蛇、片っ方の目ン玉無くてあたど。ジサマ、ハット気づいた。『あー、お前（め）だな、お前（め）だな。』ボロボロ、ボロボロど涙流して、体むじるんだけにしてジサマ泣いだど。ごじよわだから声しぼるんたにして泣いだど。

ジサマ、遅くなてから家さ戻てきたど。家の人共（ど）アみんな心配してあつて、そごさジサマ戻つて来たどごで、ほつとしたど。『おじちゃ、どしたの？何あつたの？』て皆聞いでも、『何でもね、何でもね』て言（し）て床さ行つて寝だど。



次の日の朝間（あさま）、いつもだば早起ぎのジサマいづまんでも起きでこねどごで、『おじちゃ、どしてらんだべ』『昨夜（ゆべな）遅ぐまで山歩（あさ）いて疲れだんだべね。も少し寝へでおがなが』皆でまま食つてもまだ起きで来（こ）ねどごで、兄ど嫁ア見に行つたど。



ジサマ、死んであたど。懐の中さ白一い蛇コ抱
いで、眠てらようにしてジサマ死んであたど。
倅せそうだ顔コであったど。二人で仲良ぐ天に
昇って行ったんだびよん。

とっちばれ